

越後・会津とウィリス

—明治元年、越後・会津へのウィリスの従軍医療が残したもの—

中 澤 剛

郷土史家、会津若松在住
福島県立会津大学短期大学部社会福祉科講師

Willis in Echigo & Aizu
— Left Matters from Medical Cure by Dr. Willis
Following the Army to Echigo & Aizu, in 1868 —

Takashi NAKAZAWA

Local Historian, Aizuwakamatsu, Fukushima Prefecture,
Assistant Professor, Department of Social Work, Junior College of Fukushima Prefectural Aizu University

1. 捕虜処刑阻止と傷病者保護に全力 新潟・会津戦線従軍のウィリス

1868年、明治と改元されたばかりの10月5日、ウィリスは「江戸」から改名された東京を出発し12日目に新潟県上越市高田に到着した。

高田到着後、直ちに書き送った10月16日付英国公使パークスあての手紙のなかで、ウィリスは行政の現状、戦いの見通し、産業、地理、交通、住民の動向などについて詳細に述べているが、捕虜の処刑阻止に関して官軍側に明瞭に意志表示したことに触れている。

さらに11月3日、柏崎からパークスあての手紙で、不幸な負傷者のため自分の方から戦場に近い場所に向くつもりであると述べ、敵軍を皆殺しにする恐れが強いので人間の慈悲心について啓蒙していかねばならない、疑いもなく敵味方どちらも相手の行為のせいで自分達の処置、すなわち捕虜はすべて処刑することを正当化している、と報告している。

負傷者の治療の数や内容、日本人医師に対する指導と並んで、捕虜の生命を助ける努力を積極的、継続的に行う必要を強調した。

捕虜の運命を知りたい、敵兵すべてを無慈悲に処刑する日本人のかたくなな戦争行為を改めたい、今後も捕虜を見出すことができないのではないか、すべて処刑されるのは生命の不必要な損失である、それ故さらに前線に向かいたいと述べている。

11月13日の新潟からの手紙では、150名を越す負傷者の手当のことや日本人医師との協力、彼らの動向や問題点について報告するとともに、さらに会津若松に近い新発田での手足の切断手術の予定を述べ、当局が望むなら敵味方の負傷者が数えきれぬほどの会津の城下町まで行こうと希望を表明した。

天皇の支配体制が敵兵に対して人間的な憐れみの情を持っているとは限らず、人間の生命をきわめて無造作に犠牲にしてきたと信じられるふしにウィリスは気づいていた。

前線の指揮官に、新政府が敵対する大名の家臣を見さかいなく殺害していることを世界の国々が聞けばぞっとするだろうし、文明国は憎悪心をたぎらせるであろう、敵の負傷兵に寛大な処置をとると約束されるのは大変嬉しいと伝えたのであった。

北陸口の会津征討軍総督仁和寺宮は越後口大参謀の西園寺公望、参謀壬生基修の要請にもとづき、若松で官軍と賊軍の負傷兵の苦痛をいやすためウィリスに赴くことを求めた。

パークスはこの若松行きについて次のように英国外務省に報告している。

「ウィリス医師の人的行為はいくら高く評価してもしきれぬものではありません。この博愛心に溢れた行為がまだ外国人と深い接触を持つに到らぬ日本人の心に呼びおこすに違いない親愛感の結果ほどわれわれに期待できるものはないと思われる。」

11月15日、新発田の寺院の病院で治療していたウィリスを訪れた、総督仁和寺宮の使者中根善次郎に対して「戦争や

暴動の際でもヒューマニズムは守らねばならない。文明国では国賊や重罪人でも負傷者には慈悲心が払われる、政府軍は傷ついた敵兵の無差別虐殺を容認していると思えぬ」と迫った。

翌日征討軍総督仁和寺宮との会見が実現した際ウィリスは「日本に平和と統一が実現するこの最後の戦争での負傷者を天職である医学で救済に役立つことにさらに努力したい。日英両国の友好促進に役立てば幸いで、人命に関する自分の考えはご承知のとおりである。」と伝えた。

総督はウィリスの主張を了解したうえで、さらに会津若松まで赴き、敵味方の治療のため滞在を一ヶ月延ばすことを正式に求めた。

ウィリスには江戸に開設される公使館副領事の職が待っていたが、急拠許可を得て深い雪を掻き分けつつ落城直後の会津若松に向うこととした。

この旅を、「戦争手段や捕虜の処置方法に関する日本人の常習的行為を教化するため機会あるごとにウィリスが労を惜しまなかったことを意味している」とパークスは英国外務省あて明治2年、1869年1月26日に報告している。

会津若松の周辺の村にある7ヶ所の寺に収容されていた会津の負傷兵の状態は、米の支給があるのみできわめて悲惨であった。

官軍の負傷者を収容した寺院では日常必需品が支給され不完全な医学的訓練、知識不足はあるにせよ期待されるすべての世話を受けていた。

ウィリスは若松を占領支配している官軍当局者に、賊軍である会津の負傷者を収容する病院にも必要な糧食、病人の必需品の将来にわたる規則正しい支給を約束させた。

落城後、ウィリスが泊り込んで治療した寺には天朝病院の旗が掲げられ、治療を受けた会津藩士は「悲しみに胸をふさがれたまま看護に没頭する」ウィリスに大きな信頼を寄せ、彼が一ヶ月の任期を終え立ち去る時に強い心細さを味わったと回想している。

新潟、会津の戦いの最前線の近くに設置されウィリスらが活動した越後口病院の変遷については、昭和33年10月25日から3回にわたり、新潟県立病院に勤務していた蒲原宏氏が日本医事新報にくわしく掲載しておられる。

ウィリスは自から請求しなかったが、英国のクラレンドン外相から公文書で賞詞を得たのちにパークスの求めに従いようやく旅費と経費の請求を行なった。

その合計260ドルのうち140ドルは会津藩の傷病兵の援助に支出されたものであった。

「厳しい寒さと深い積雪のなか着のみ着のままで火の気のないあばら屋に詰めこまれた傷病者は米以外何の支給もなかった。

その悲惨を軽減するため私は所持金すべてを注ぎこんだ。僅かな金額が非常に役立つところで持合わせがこれだけだったのは残念であった。」と彼は報告している。

ウィリスが越後国征討軍に従軍して治療した負傷者は600人、さらに約1,000人の手当の処法を指示した。

このうちミカド軍の兵士は900人、会津軍兵士は700人、大腿切断を始め大小38回の手術を実施したが大部分は銃創であった。と記録されている。

2. 敵味方差別のない医療 籠城女性達に大きな影響

ウィリスの報告書のなかに、会津鶴ヶ城の落城直後に聞いた話として藩士の妻や娘達が髪を切り砲丸造りや運搬、夜間の歩哨、傷病者の手当などに大活躍したことに触れている。

江戸開城後、追討軍と交戦していた会津藩は白河口、日光口、新潟口、二本松口など多方面で戦いを繰返し、そのつど負傷者が後送され、彼らを収容治療する軍陣医部が会津鶴ヶ城の西に隣接する藩校日新館のなかに設けられていた。

日新館内にあった蘭法医学寮、漢方医学寮が軍陣医部にあてられ、江戸から会津に逃れてきた徳川將軍の侍医、幕府御医師頭松本良順を迎えたのを機会に藩主松平容保は軍陣病院設立について指示をした。

良順は会津藩の漢方医が大部分を占める医師約六十名を医師団とし急拠作成した西洋医学テキスト「療瘼略法」を使用して連日講習をしたが年令の高い層や漢方医の出席は良くなかったといわれる。

官軍が城下に侵入する直前、松本良順らは北海道方面に退去し、会津藩軍陣病院は城中大広間に移された。

医師を助け傷病者の介護のため藩主の義姉照姫を中心に藩士の妻や娘たち70～80名が、自発的、自然発生的に活動を始めた。

家老山川大蔵の妻とせ子も活動していたが飛来した砲弾で重傷を負い、間もなく照姫らに見守られながら絶命し、当時8才で活動に参加していた共に傷ついた大蔵の妹捨松が目撃している。

次々と運びこまれる負傷者に対して、医薬品と資材が不足し、外科医療がほとんどない籠城中の治療水準は低いものにならざるをえなかった。

身内の負傷者のみならず他藩士も含む負傷者への素朴ないたわり、同情心、人間愛が看護にあたる女性達の行動の源泉であった。

ウィリスがエジンバラ大学に入学した翌年クリミア戦争が始まり、フローレンスナイチンゲールが修道院を出て看護活動を始めたのであった。

野戦病院のテントで飢え、寒さ、苦痛に悩む傷病兵は暗闇にランプを掲げ巡回するナイチンゲールに神と人間の愛の姿を見て、救いと希望を実感したのであった。

彼女の行動は英国本土に紹介されて熱狂的に支持され、国際赤十字設立に発展し、無差別無意味な人命の消耗が回避されることになっていった。

この時英国朝野から寄せられた募金をもとに1860年聖トーマス病院に看護婦学校が設立され、彼女の自発的な現実体験が理念に昇化され、次元の高い看護教育に到達した。

ウィリスが来日する前年のことである。

会津鶴ヶ城が落城し、藩士は賊軍として他藩預けの身となり雪のなか移住地に向って行進していった。

傷病者は付近の村の7ヶ所の寺に官軍側が設置した天朝病院に収容されたが、ウィリスが到着するまでは医療は旧来のままであり、給付米のみが与えられていたのみであった。

傷病者の家族が付添い食事や介護にあたっていたが、ウィリスが到着すると、消毒、絆創膏による傷口の閉合、副木の使用など適切な外科治療がなされ、必要な手術も行なわれた。負傷者とその家族は敵味方の区別なく一視同仁に治療するウィリスの存在に瞠目し、日本に平和と安定をもたらす最後の戦いに傷ついた人々に奉仕する、ヒューマニズムに燃える行為の恩恵を受け、同じ医療でも次元と水準の違いのあることを知った。

3. 10年後ウィリスの行程を旅したバード

ウィリスは自分の所持金のすべてを、病舎にあてられた寺に収容されている悲惨な状態の会津藩傷病者のために提供し、占領軍当局に以後の糧食の確保と治療の必需品の支給などを保証させた。

傷病者のなかには老人や婦女子も含まれ、階級もさまざまであったとウィリスは記している。

ウィリスが寝起した村長宅は間もなく農民の一揆に襲われ焼落ち、危く難を逃れたウィリスはその様子をこまかく報告書に記載している。

明治元年1868年12月2日、約一ヶ月間治療に明け暮れた酷寒の会津平野を出発し新潟に向ってウィリスは帰途についた。

寒気は厳しく食糧不足が著しいため、従者や召使いのほとんどが途中で倒れた。

一日の行程を終え辿りついた宿舎は寒風が吹きこみ、木炭火鉢の細々としたぬくもりで指先を暖めながら、唯一の楽しみである夕食を米と鮮度の落ちた魚で済ませつつ歩を進めていった。

難渋する雪路に人夫を雇入れることに非常な困難を伴った。

びしょ濡れになり、荷や駕籠が遅れ着替えもなく泊ることとなった津川という町の寺で、住職から手厚く遇されたことをウィリスは特に記録している。

暖かく迎え入れた住職は自分の着物を貸しあたえ、上等の菜や酒を振舞い、自分は宗教上の理由で執ることができない魚を料理してご馳走したのであった。

気軽に会話する住職は、夏になったら訪れたいが驚かないで頂きたい、外国人について知りたいことが沢山あるので、と申出たのであった。その教養や開明的態度、人間としての奥深さは印象的であったようである。

ウィリスは、訪問は嬉しいことで大歓迎して今夜のもてなしにいくらかでも応えたい、と答えたと記している。

この同じ道を10年後の明治10年1878年6月の末、小柄で知的な目を輝かしたひとりの英国婦人が日本人青年を通訳として引き連れ馬に揺られながら会津から新潟に向って進んでいた。

イギリスヨークシャー生まれの牧師の娘、イサベラバード、年齢は47才であった。

オーストラリア、ニュージーランド、ハワイ、アメリカ大陸などを旅行したのち日本奥地旅行に挑戦していたのである。

東京から日光を経て会津に入り、車峠を越え津川に入ったが、女性らしいこまやかな観察とエネルギーに満ちた記録文は、ウィリスの報告書と同様に当時の日本をとらえた外国人の眼が主に何に向けられていたかを知るうえで興味深い。

(平凡社東洋文庫：日本奥地紀行)

宿泊する部屋は暗く汚く、やかましく、下水の悪臭が漂いむかむかとし、近所の村人が好奇心に満ちて黒山のようにとり囲み押しあいへしあいするのが常だった。

住民は煙のすすで汚れ黒光りする部屋のなかで洗濯しない衣服と蒲団で寒さをしのぎ蚤やしらみと共に生活していた。目に滲みる煙が家中に漂う宿屋でバードのプライバシーは穴だらけの障子で辛うじて守られた。

すばらしい自然の風景であったが、人々は貧しく、眼病、湿疹に悩まされ不潔でむさくしい様子であったと記されている。

外国の苛酷な自然条件のもとで歩を進める旅で唯一の楽しみである食事は、10年後同じ道を辿るバードの旅もウィリスの旅同様ひどかったようである。

彼女の通訳、コック、兼護衛であった伊藤という青年は、津川の隣にある野尻の宿でようやく手に入れた鶏を嬉しさのあまり夜半寝床にまで見せに来た。

明朝の食事に煮て供するように指示しておいたが、朝になって伊藤は大変恐縮して現われ、料理しようとした際に森に逃げられたと告げた。

十日間魚や肉や鶏肉を食べずにいることはどんなにつらいか、経験しなければ分らないだろうとバードは恨みがましく記録している。結局彼女は卵とそばの朝食を摂り、泥沼のような急角度の未整備の山道を、暴れたがる馬の背に揺られ越していった。

やっと到着した津川の宿でバードはたっとひとつ出された生鮭の切身に、こんな美味はこれまで味わったことはなかったと感激して記録している。

津川から新潟までの舟旅でくり広げられる初夏の風景は、廃墟のないライン川であり、それより美しくうっとりとした、とバードは人心気をとり戻した。

バードは比較的気候の良い7月初旬に津川を訪れているが、ウィリスは積雪のある12月末であり、その苦勞のほどがしのばれる。

戦乱がようやく収まり平和が戻りつつあるとはいえ、各地の病院で負傷者の治療の指示をしながら明治元年12月末日まで東京に戻ろうとするウィリスの旅は相当苛酷なものであった。

4. 看護学校・病院の設立運営に尽力した会津女性たち

黒船来航を機に政治経済の矛盾が表面化し徳川幕藩体制が崩れ去ろうとしている時に、京都守護職、浦賀警備、えぞ地警備などを引受け財政を破綻させ多くの人命を失い、賊軍とされ敗北した会津藩の人々にとって明治維新とは何であったのかという問いかけは長い期間続いた。

血気にはやり暴力に訴え鎮圧された人々、明治政府の下級官僚で身を安じた人々、追放された青森や北海道で開拓に従事し土に戻っていった人々、軍人の途を辿るしかなかった人々など、生活の途は多様であった。

そうしたなかで戦争と人間について体験の本質を問い直し、わが国が近代化国際化を進める際に人類愛を基本に明治の世に貢献する活動を展開したひとびとが、ウィリスの天朝病院との関わりの中からも幾人も現われた。

明治5年からロンドン聖トーマス病院医学校に留学していた高木兼寛が明治13年に帰国し、海軍医務局の任務についたが医師養成のため成医学講習所を開設、さらに明治17年有志共立東京病院として公式に開院、のちに慈恵会病院と改名された。

開院して間もなくの明治16年11月に、会津鶴ヶ城攻撃の砲兵隊を指揮していた陸軍大臣大山巖と結婚したばかりの大山捨松がこの病院を訪れ、看護婦養成の必要性が話合われた。

捨松は会津藩家老山川大蔵の妹であったが開城後、明治政府派遣の女子留学生のひとりとして渡米、日本人として初の看護婦免許を取得して帰国した。

落成したばかりの鹿鳴館の花と言われ舞踏会など社交に活躍する傍ら、明治17年6月から慈善市を同館で開催しその売上金7,500円を慈恵会看病婦養育所に寄付し、明治19年2月開校にこぎつけた。

この年6月、京都の同志社でも京都看病婦学校が授業を開始した。

同志社を創設した新島謙の妻八重子も会津で籠城戦に参加し、城内の軍陣病院や落城後近郊に開設された天朝病院の実態を十分に理解していて病院と看護学校の創設に尽力したのであった。

東の慈恵、西の同志社と日本で初の看護学校が会津籠城中に自然発生的な救護看護を経験した女性達によって、17年後、ほぼ同時に開設された。

この城中の看護活動を指揮した照姫の侍女の母親だった瓜生イワは、娘の安否を気づかい城下に駆けつけ、惨状を見かねて負傷者や被災者の救援活動を始めていた。

その後、孤児収容施設や間引き防止対策に奔走した瓜生イワが、明治26年になり大山捨松が創設や育成に尽力した東京赤十字社の協力を得て若松に「私立慈善済生病院」を開設したのは病院という施設や組織、機能がどれほど人々に安心と希望をあたえるものか知りつくしていたからであった。

日本が近代国家としての統一と平和を実現するための最後の戦いであった明治戊辰戦争に際して、身命を賭し無報酬で博愛人道を掲げ医術を通して活動したウィリスの実績を、城中城外で身内のために救護にあたり医療の重要性を知った会津女性たちは、開城後の天朝病院のより高い次元の理念や実態、価値を正確に理解した。

薙刀をとり白鉢巻姿で官軍に斬りこみ、撃ち倒され、多くの自刃者を出し、落城後会津を追われ全国各地で悲惨な奈落の底の苦難を余儀なくされた女性達のなかで、山川捨松、新島八重子、瓜生イワらは体験の意味を問い直し落命したひとびとの鎮魂となる行動を自分なりに進めていった。

苦難のなかにも比較的環境や配偶者に恵まれた幸運な女性たちであったと言えるかもしれない。

長い歲月厳しい生活を続けながらそれぞれの胸中で暖められ心ひそかに準備していたものが、互いに緊密な連絡もないうまま、明治15年過ぎになっていっせいに現実のものになっていったのである。

人類の文明がより高い段階に進歩することを願い、体験の意味を深く洞察した結果、看護や医療をひろく平等に普及するという仕事に関わることとなっていった。

殺戮と破壊が横行し人間の尊厳がたやすく放棄される戦場で、ウィリスというひとりの男が僅か一ヶ月ほどの滞在中に身をもって示した博愛、人間の尊重の精神と、近代合理性の結晶である医学技術とが融合した活動とが、彼女たちの強い動機づけとなったことは否めない。

いま会津若松市には看護系の高校、専門学校、各種学校が6校、福祉系短期大学部が1学部あり約1,000名が学んでいる。

人口12万の都市でこれほど看護教育、福祉教育を行なっている例は稀である。

内戦の廃墟のなかでなされた人間愛と使命感に燃えたひとりの外国人医師のひたむきな行為が、ひとびとの胸に火種を残し、今もなお形を変え姿を改めて受けつがれているように見える。